

シャルル・ビュルスの都市設計思想 – ブリュッセルにおける都市開発を通して

The Urban Design Concept of Charles BULS –Based on the Urban Development at Brussels

田中暁子、西村幸夫、北沢猛
Akiko Tanaka, Yukio Nishimura, Takeru Kitazawa

This paper aims to reveal the urban planning concept of Charles BULS. When he was the mayor of Brussels(1881- 1899), the Haussmannism had already been called into question. So, he tried to improve sanitary situation reducing the number of impasses by the minimum required land, at the same time he tried to conserve historical monument, for lure the middle-classed people back in city center. What he thought as urban conservation was extended from the single monument to the group of historic buildings. His interest was not limited to historic preservation; he tried to make many beautiful roads and parks. After resigning, he opposed to the urban development of Leopold II by designing the plans from the pedestrian point of view.

Keywords: シャールル・ビュルス,ブリュッセル,近代都市計画,
Charles BULS, Brussels, modern urban planning,

1 はじめに

(1)研究の目的と位置づけ

19世紀末のヨーロッパでは、パリに代表される直線大通りと幾何学的配置の都市開発手法に対する中で、芸術的側面を考慮するようになり、社会・経済・芸術を総合した活動としての都市計画が登場した。芸術的側面を考慮した都市計画に関する理論を打ち立てた人物としてカミロ・ジッテが、その理論を田園都市建設に応用した人物としてアンウィンが良く知られている¹⁾。

ベルギーの首都ブリュッセルでは、当時のブリュッセル市長アンスパックとベルギー国王レオポルド2世により、センヌ川地下埋設と中央道路建設(1868-71)や、ノートルダム・オ・ネージュ地区改造(1875-77)等の既存の道路を無視した大規模な都市開発が行われた。それらは都市問題の解決に一定の効果を上げた一方で、中世風の街並みの破壊が批判を呼んだ²⁾。それらの開発に対抗して、地区の個性を重視することや、町の細部まで美化することが行われるようになった。その際に中心的役割を担ったのが、アンスパックの後に市長に就任したシャルル・ビュルス(Charles BULS:1837-1914;以下ビュルスと記述)である³⁾。

本研究では、ブリュッセル市長として芸術的側面を考慮した都市計画を実行し、ヨーロッパ諸国に強い影響力を持ったビュルスに焦点を当てる⁴⁾。

以上の状況を鑑み、本稿は人物史研究⁵⁾⁻⁸⁾と当時の雑誌記事⁹⁾⁻¹³⁾、ブリュッセル都市史に関する文献¹⁴⁾⁻¹⁵⁾に依拠し、ビュルスが市長在任中のプロジェクトと、市長辞職前後のレオポルド2世の壮大な都市開発への対案にお

ける主張を通して彼の都市設計思想が如何なるものであったのかを考察する²⁾。

(2)市長就任前のビュルス

ビュルスは、1837年10月にブリュッセルの金細工職人の家に生まれた。家業を継ぐためにビュルスは画家の下でデッサンの手ほどきを受け、金細工の知識を深めるために1858年から1860年にかけて、パリとイタリアで修行をした。パリ滞在中にはナポレオン3世の専制政治とフランスの帝国主義に嫌悪感を抱き、イタリア滞在中にはイタリアの自治主義運動に強く魅せられ、自国の文化の追究につとめた。

ベルギーに戻り、金細工職人の仕事を始めたが、1864年には教育連盟の設立に携わり、教育改革へ情熱を注いだ。ベルギーは1830年に独立したばかりの新しい国家であった事に加え、フランス語の圧倒的優位とフランス文学の蔓延により、独自の文化が不在であった³⁾。ビュルスは「繁栄した過去を現在に留めている遺跡に燃えるような愛国心を掻き立てられても、私たちは悲しいことにフランス語という異国の言葉でその感動を謳うしかない」と嘆き、フラマン文化再興を主張した。母語による教育の必要性を雑誌記事や国会答弁で訴えると共に、ブリュッセルにおけるフラマン語の小学校及び劇場の設立に腐心し、フラマン文化擁護主義者として活動した⁴⁾。

ビュルスは1877年に自由党から市議会議員に当選した。1879年に公教育補佐官に任命され、アンスパックが死去した数ヵ月後の1881年12月17日にブリュッセル市長に就任した。

以上で見てきたことから、彼が関わった都市開発の根

底には、自国の歴史を象徴する地区が失われることへの反対に加え、フランス文化の蔓延により引き起こされている自国の文化への執着の低下に対する警鐘という意味合いがあったと考えられる。

2 ビュルスが指揮を執った都市開発

(1) アンスパックによる都市開発の影響

(I) アンスパックによる負の遺産の処理

1881年にブリュッセル市長に就任した際にビュルスは、アンスパックが手がけた整備によって生み出された大量の土地売却と、未完成の都市整備も受け継いだ。そのため、出費を最小限に抑えながら事業を進める必要があった。

(II) 聖カトリーン教会の鐘楼前広場の提案(1883)

聖カトリーン教会はヴィエルジュ・ノワール地区再開発の為に収用されたブロックにあった。その際に、ビュルスは鐘楼の前面に35m×60mの広場を設置し、「絵画的な様子を強化し、外国人にとっても面白みのある素晴らしい眺めを生み出す」ことを提案したが、完成後に転売可能な土地面積の少なさから反対者が多かった。

市の財政を安定させるために綿密な収支決算表の作成と、各分野の専門家による特別機関の設置⁽⁵⁾によって、赤字が出ないように調整しながらも整備の質の高さを保ち、建築活動を支え、景気の波による影響の解消することをビュルスは目指した。

ビュルスは、対案として提示された街区の内側に斜めに道路が通される画一的な計画(図-1)に反対したが、予



図-1 ヴィエルジュ・ノワール地区開発(出典:6)

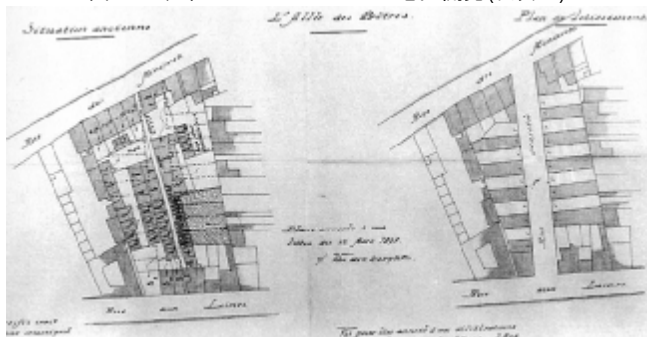


図-2 袋小路解消の図面(出典:6)

算の問題から最終的に同意した。

(III) 衛生問題の解決

衛生問題を解決するために、優先的に改善すべき不衛生な地区のリストが作られた。アンスパックのように地区全体を収用し、大規模な開発を行うのではなく、このリストに基づき、建物が売りに出された際に市が取得し、随時、袋小路を解消するという方法が取られた。税収の見込める中流階級(芸術家、事務員、商人等)を住ませるためにアンスパックの頃よりも狭い約6m幅の住宅が計画された(図-2)。整備手法に関しては、超過収用により事業費を賄うというアンスパックと同じ手法を採ったのであるが、収用面積を少なくすることで公共投資に伴う財政リスク減少や、不動産業者の仲介を経ない市当局と土地所有者の直接交渉、そして土地利用や衛生条件、形態規制や美観等について厳しい規則が付帯した状態での土地売却が可能になった。

(IV) 歴史的記念物への影響

「財政面からのみ公共事業を評価していると、町の様子が均一で何の特徴を持たない物になり、ヨーロッパの他の近代都市と見分けがつかなくなってしまう」と、ビュルスは嘆いたが、出費を抑えて市の財政を安定させることが第一の目標であり、市の総体的な魅力の向上の為に歴史的記念物を活用するのではなく、聖カトリーン教会の鐘楼の保存のように、歴史的記念物を単純に残すことだけが行われた。

(2) 歴史的記念物単体の復元

(I) 王の館の復元(-1887)

王の館は15世紀にブリュッセルがブルゴーニュ公国の都となった当時の繁栄の名残を現在に留めたグラン・プラスに面した建物で、1536年建設された。しかし、1695年にフランスのルイ14世による砲撃により大半が焼失し、オリジナルと違う形で再建された。

ビュルスは王の館を16世紀の建設当初の繁栄を忍ばせる形に建物を復元することを主張した。「建物正面の1、2階部分には、円天井の基部の縁取りと鉄製の止め具による穴があり、確かに1、2階のファサードに沿って回廊が建設されたことを示している」⁹⁾ことや、「既存の舗装の下を発掘し、回廊の基礎」⁹⁾が発見されたこと、建設当時に描かれた絵には屋根の上に小さな尖塔が描かれてい



写真-1 (左)王の館再建前、(右)再建後(出典:6)

ることなどによって復元が行われたため(写真-1)、「不完全な資料に基づいて、復元からかけ離れたことをした」とビュルスは後に述べている。

(Ⅱ)トゥール・ノワールの復元(1888年)

トゥール・ノワールの復元に於いても同様な問題に直面した。トゥール・ノワールは第1城壁の遺跡である。ヴィエルジュ・ノワール地区の密集した住宅に埋もれていたのだが、市による再開発事業の強制収用の際に発見された(図-3)。

1888年市議会においてビュルスは「尊敬すべき過去の痕跡が破壊されることは、住民の記憶を消し去ることを意味しており、住民の町に対する愛着を減少させてしまう」、「遺産の細部、石ころでさえも、先祖の苦しみや戦い、勝利を物語っている。歴史に形と光景を与え、石ころが無言で示している歴史に若者の興味が駆り立てられ、現在と過去を繋ぐ糸となる。そして、近代化に伴う均一化や平凡化を防ぎ、町の重要なアクセントとなる」と答弁し、復元を主張した。

ビュルスは調査に基づき、「当初の構造を隠している建築物を取り除くことが、修復と復元を意味する。不確かなものを加えるのではなく、以前の外見に塔を戻すために多くの古い要素を尊重する」ことを考えた。

ビュルスは、古代軍事建築専門家達に意見を求めた。彼らは「史料が残っておらず、建設当時の配置を一つに特定することは出来ない」と結論付けたが、維持管理の容易さを考慮し、円錐形の屋根を持つ建物を提案した。同時に彼らは「古記念物は再発見された状態のままで保全すべきであり、個人的な考えに基づく下手な復元は、時代背景の誤認に繋がる」という忠告をした。

ビュルスは、「古記念物の保全には教育目的があり、粗野で破壊された状態で放置すると、記念物の発信するメッセージが伝わらなく、多くの見物客にとって興味が湧かない建物になってしまう」と考え、円錐型の屋根を持つ建物への復元を実行に移した。

しかし莫大な費用をかけて真実とは異なるものを作り出したことに対して、市議会で非難の声が上がった⁽⁶⁾。

(Ⅲ)輝かしい過去の再評価

以上のように、都市拡張が進み、郊外に有産階級が流出する中で、歴史的都心の特徴を明確にすることで住民の無闇な郊外移住をくい止める意図の下で、ビュルスは、放置された状態の歴史的記念物の価値を評価しやすいように、歴史的記念物の復元を主張するようになった。

王の館は当初の設計とは違った形で再建がなされていたために、トゥール・ノワールは再発見された際に住宅の中に埋もれていたために、ビュルスは不確かな資料に基づいて復元を行った。彼は、真の歴史性の保存と記念物

の発するメッセージを強化するための不確かな要素の付加の間でジレンマに悩まされていた。

(3)建築物群の保全

(Ⅰ)グラン・プラスの保全(1883-97年)

グラン・プラスの保全は、修理や建て増しが一貫性を持たずに行われていた。個人所有のギルドハウスの修復と、星の館の再建という2つの面から行われた。

個人所有のギルドハウスの修復については1883年に、

- 1:ファサードを修復するための補助金を所有者に支給
- 2:費用が支給されたら必ず修復が実行に移されるようにグラン・プラス周辺の個人所有の建物を規制

- 3:建物の維持に関する取り決め

の3点について市と所有者の間で協定が結ばれ、徐々に実行に移された。

グラン・プラス保全の次のポイントは、星の館という小さな建物の再建であった。星の館は、1853年に市庁舎の南に隣接する狭い路地を広げるために取り壊されていた。

ビュルスは1894年に市議会において、「この小さな館の取り壊しによって、シャプリエル通りとホテル・ドゥ・ヴィル通り⁽⁷⁾の間に建ち並ぶ館に悲しむべき割れ目が生まれた。これらの館の切妻屋根の段階的減少が素晴らしい効果を生み出していたのであり、白鳥の館は、通りと屋根の高さの落差を緩和するための建物が必要である」と述べ、建築物群の調和を取り戻すために星の館の再建を提案した。この計画は「以前は安普請のモチーフによって修理されオリジナルの状態でなかった物を建設当初の様式で再建すること」、「人々が自由に回遊できるように、1階部分は回廊にする」といった特徴があった。1896年には星の館の再建が完了し、視覚的には囲み感があるが、歩行者は狭い路地に関わらず自由に行き来が出来る環境が出来上がった(写真-2)。

(Ⅱ)建造物群の再評価

「市民の目が道路上でセンスの良い物にだけ注がれ、住民の自然に芸術的な感覚



図-3 発見当時のトゥール・ノワール(出典:6)



写真-2 (左)星の館再建前、(右)再建後(出典:6)

注)再建前の写真右端の建物が「白鳥の館」であり、道路沿いの壁面が全てむき出しになっている。

を惹き付け続ける」環境を作るために、グラン・プラスの保全では、切妻屋根の連なりや、建築物群としての一体感、囲まれ感を生み出すことが目指された。

また、星の館が壊された原因である狭い路地の問題を、1 階部分を回廊にすることで解決し、設計当初の形を模索したのではなかったことから、歴史的記念物の保全のみに傾倒したのではなく、都市問題の解決も同時に図っていたと考えられる。

(4) 都市景観の美化

プチ・サブロン広場やアンスパック記念噴水、ジョセフ・ステヴァン通り⁽⁸⁾で、1:歴史へのオマージュとなる要素を取り入れる 2:周辺環境の調和を乱さないように配慮する 3:細部まで美しいモチーフで飾ることに気を配った新規開発が行われた (表-1)。

ビュルスの目標は、「芸術が芸術を引き起こす。芸術作品を増やすことによって、刺激剤がなければ無気力なままであったらう才能が開花する兆しをつくり、芸術家を増やす」という言葉に表されている。芸術的刺激を感受できる環境を作り出すために、「美と誇りを生み出す古記念物を古都で保存するだけでなく、更なる美と、魅力を都市に付加する機会を失わないことが重要である」と考えていた。住民の意識を高めることに加え、美しい都市を作ることによる観光客の増加も狙っていた。

(5) ビュルスが指揮を執った都市開発のまとめ

アンスパックから引き継いだ事業は、市の財政を安定させることに主眼が置かれていたため、歴史的記念物を単純に保存することが行われた。就任数年後からは、歴史的記念物自体の魅力の向上や、周囲との調和を考慮した保存や修復が行われるようになった。また新規開発の際に歴史性を表現することや、細部まで美化することで魅力を加えることも行われるようになった(図-4)。アンスパックが指揮を執った都市開発に比べると規模が小さいが(図-5)、町の歴史や美を考慮することが行われた。

3 レオポルド 2 世の大規模な破壊を伴う中心部の開発に対する批判⁽⁹⁾

1890 年代中葉に、モンターニュ・ドゥ・ラ・クールを取り壊し、モン・デザールを整備しようというレオポルド 2 世と対立した。王との確執や彼が保全を訴えた地区が取り壊されたことによる失望により、1899 年 12 月 16 日に

表-1 ビュルスが都市景観の美化に努めた開発の特徴(表中 1-3 は本文中の分類に対応)

名称	1	2	3
プチ・サブロン広場 (1890)	■ 16 世紀に活躍した人物と中世ギルドの 48 種の職業を表す像を配置 ■ 15-16 世紀にブラバン公の宮殿を取り囲んでいた柵のプランを踏襲		■ 広場を囲む柵の金網部分に、花束やバラ、唐草、葡萄の蔓模様の装飾 ■ 著名な芸術家 MELLERY が像を制作
アンスパック記念噴水 (1894)	■ 1863-1879 年にブリュッセル市長であったアンスパックを記念	■ 広場の雰囲気を壊さない噴水円柱のデザインを検討 ■ 周辺の建物への壁面広告を規制する協定を作成	
ジョセフ・ステヴァン通り		■ ファサード・コンクール の開催(1894)	

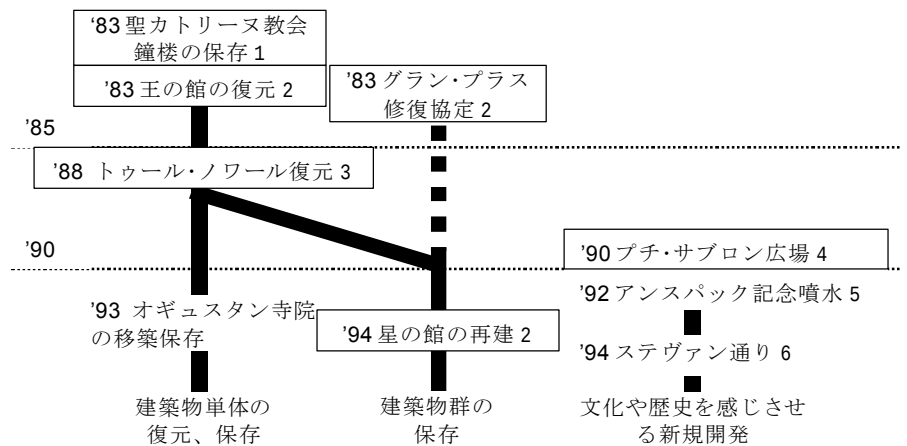


図-4 ビュルスが指揮をとった都市開発のまとめ

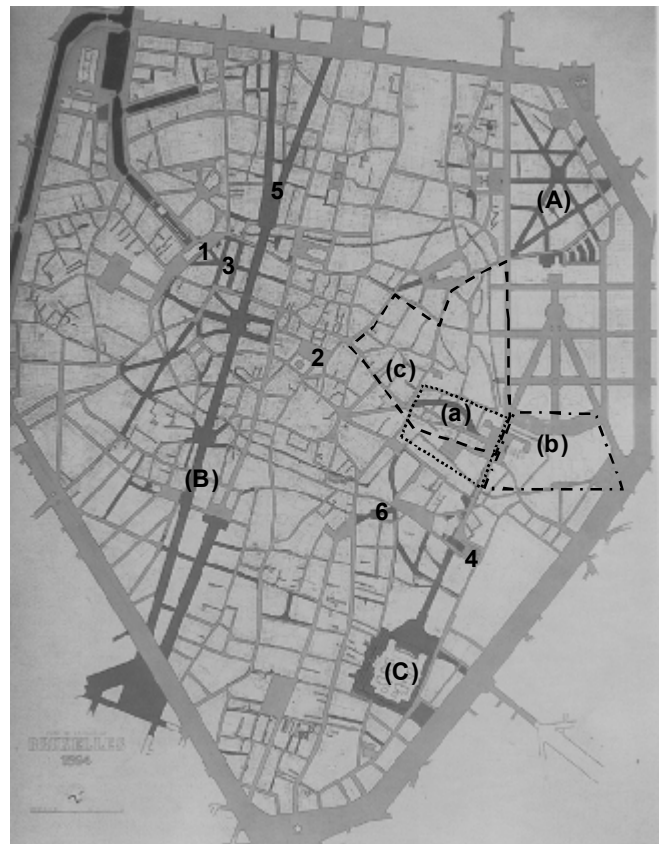


図-5 1866-94年のブリュッセルの都市開発 (出典:3,p.155に加筆)
注) アンスパックが関わった主な開発は、A)ノートルダム・オ・ネイジユ地区改造、B)センヌ川地下埋設と中央道路建設、C)最高裁判所。ビュルスが関わった主な開発は、1-6(図-3 に対応)、対案を提示した計画は a)モンデ・ザール計画、b)王宮広場計画、c)中央駅開発計画

自ら辞表を提出し市長の座を降りた⁽¹⁰⁾。市長辞職後は、レオポルド2世による壮大な都市整備に積極的に対案を示した。

(1)モン・デザール計画(1893年)

ブリュッセル旧市街の南北を走るセンヌ川の東部には河岸段丘が形成されており、段丘崖が岬のように飛び出した部分がモンターニュ・ドゥ・ラ・クールであり、急勾配でカーブの多い狭小道路に起因する交通事故が多発したことや、隣接するサン・ロック地区が極度の住宅密集により不衛生であったことにより、19世紀中頃から数々の改善計画が提案されていた。歴史的には、ブラバン公が居を構えた頃から19世紀初頭までは上流階級の居住地であり、立派な邸宅も数多く存在している限界であった。

美術館の拡張計画も同時に提案されたアルフォンス・バラによるモン・デ・ザール計画(1880)がレオポルド2世によって推された。ビュルスはこの計画に異議を唱え、市の役員会の名義で1893年に対案を提出した。

ビュルスはラヴァンスタン邸とドュピュイク邸が作り出している境界の調和が、台無しになってしまうと考え、「ラヴァンスタインの小路を損なわず、真の美しさをしっかりと指摘できるように景色を保全する」ために、カーブを計画よりも低い場所に通すことを訴えた(図-6)。

レオポルド2世が対案の撤回を迫ったが、「新しい広場が美術館の広場と同じように寂しいものになる点、巨大な階段を誰も昇降しない点、商業の盛んなマドウレス通りを圧迫する点」からビュルスは拒否した。

(2)王宮広場再整備計画(1907年)

レオポルド2世のお抱え建築家のマケは、1903年に王宮広場の再整備計画を立てた。これは、ブリュッセル公園の多角形の部分に宮殿の前庭を作り、前庭と王宮前広場の間に柵と4つの小さな建物を宮殿と公園の間に設置

しアクセントを付け対称性を強調させる計画であった。加えて、広場はレオポルド地区の碁盤の目状の道路に平行な長方形であり、非常に幾何学的であった。

ビュルスは、「公園は、王宮と同様に、全体の調和美に貢献するスタイルとプロポーションを持っている。これに軽率に触れると、公園に設計者が与えていた調和を破壊する」と述べ、全体の調和美と、公園の突出部と道の幅が生み出している囲み感を守ることを訴えた。

王宮広場再整備前は広場に集う市民を主題にした絵画が多数描かれていたが、マケの計画に基づいた再整備が実行された後は歩行者のための空間ではなくなってしまったことから、ビュルスは歩行者にとって最適な空間を追求していたと考えられる。また、マケによる図面が俯瞰図で描かれていたが、ビュルスが対案として提示した図面は、歩行者の視点から描かれてことからそのことがわかる。

この事例では、公園の設計者が意図的に閉鎖的な空間を作っていたため、オリジナルの設計意図の保持を主張することになった。

(3)中央駅開発計画(1911年)

ブリュッセルの欧州の中継基地としての役割を強化するために、北駅と南駅を連絡し中央駅を開設することが1895年にレオポルド2世によって提案された。

1903年4月7日に、王宮広場からの眺望を守るためにピュトゥリ地区の一部の建物の高さの規制も含む中央駅開発に関する協定が市と国の間で結ばれた。しかし、マケが計画したこの高さ制限は、王が王宮のバルコニーから中心部の屋根並みを望むことを想定したものであったため、広場の利用者にはそのような眺望が存在しなかった。加えて、ラヴァンスタン通りの利用者から見ると、ロワイヤル通りの建物の棟が、高さ規制に沿って新しく建てられる建物から飛び出し、不快な空間となることが予想された。

レオポルド2世とマケの死後、協定の見直しがされることになり、1911年にビュルスを委員長とする専門委員会が設置され、様々なスタディが行われた。1912年に出された委員会のレポートでは、マケにより提案された王宮広場からの眺望以外に、クダンベルグ通りとビブリオ

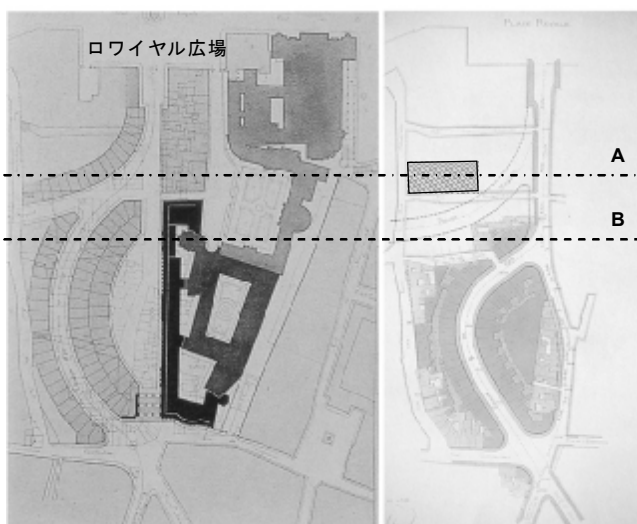


図-6(左)バラのモン・デザール計画 (右)役員会の対案
(出典:14に加筆)

注)Aがバラの、Bが市の役員会の計画におけるカーブの開始位置。右図に斜線で示したのが、ラヴァンスタイン邸の位置。



図-7 ビブリオテク通りからの眺望シミュレーション(出典6)
注)道路正面の建物高さにより鐘楼の見え方が変化している

テク通りから市庁舎とベルヘム・サン・タガットの丘への眺望を保全する高さ制限のスタディが行われた(図-7)。これらのスタディは、「市庁舎の鐘楼は、視点場によって見え方が違う」ため、歩行者の目の高さから最も美しく見える角度となる眺望点を選んで行われた。

4 まとめ

以上により、次の事項が明らかとなった。

(1)ビュルスは必要最小限の土地収用による袋小路の解消や、グラン・プラスに至る狭い路地の問題といった中心部の都市問題を解決し、住み心地の良い空間をつくりだすとともに、大規模な開発により固有の歴史を喪失しつつあった町の魅力を向上させるために、住民の記憶に残る場所の保存と、住民が町の歴史や美を誇ることが出来るような都市開発を行った。大規模な開発によって華美な町並みをつくりだすのではなく、小規模な開発で住みやすく愛着の高い町を作ることで、中心部から郊外に流出してしまった有産階級の人口回復と、市の財政の安定を図った。

(2)ビュルスはレオポルド2世の開発計画によって生み出されると予想される広々とした空間が利用者にとっては心地よいものではなく閑散とした場所になってしまうと考え、開発の結果生み出される都市空間が利用者にとって魅力的で心地よい空間になるかを重視して対案を提示した。対案においては、歴史的記念物の周辺との調和や利用者に好まれている既存の都市空間の要素を崩さないような計画にすることに注意が払われた。同時に歩行者の目の高さから見たブリュッセルを代表する景色の美しさが阻害しないように配慮し、住民にだけでなく、観光客にとっても魅力のある町にすることを追求した。

補注

(1)パブリック・アート国際会議を開催し各国に芸術的側面を考慮した都市計画の伝播につとめた点と、彼の著書「都市の美学」のジッテの著作の内容との類似性が1890年代にヨーロッパ各国でオスマンの手法に批判が集まっていたことを示している点から、欧米近代都市計画黎明期に関する研究においてビュルスは頻繁に言及されている(文献4)、5等)。特に5)では、カミロ・ジッテの重要な同時代人としてパウマイスター、シュテューベンとともにビュルスが挙げられている。このことから、彼は近代都市計画史上看過することのできない重要な人物であると考えられる。

(2)6)は7)、8)をふまえ、彼の生い立ち、市長在任中の都市整備、国際的影響など、広範囲にわたる研究であり、高く評価できる。しかし、市長在任中及び辞職後の都市設計思想を一貫して纏めたものではないし、ブリュッセル市のアーカイブに保存されている資料を主にして論を進めている。そこで本研究ではRIBA-Journalなどベルギー国外の同時代の雑誌記事9)-13)により6)を補完するとともに、時代背景を把握するためにブリュッセル都市史の本を用いた(ブリュッセル都市史の本は、本文と関係のあるもののみを参考文献として記載した)。なお、6)はビュルスの市議会での発言や手紙等の一次資料に記載されている言葉が忠実に記述されており、ビュルスの発言の引用をするには適切であると判断した。そこで、論文中的シャルル・ビュルスの発言は、特記しない限り文献6)からの引用である。また、本文中に出てくる主要なブリュッセルの地名については、図-4参照。

(3)フランス語圏である南部ワロン地域は、石炭・鉄鉱石の産地を有し、近代に入り、シャルルロワ、ナミュール等、ムーズ川流域に鉄鋼・化学工業が興り、英国に次いで2番目に産業革命を経験し、ヨーロッパの先進工業地帯となり、1830年にオランダから独立した新生ベルギーの機関車の役割を果たす。それがワロン地域のフランデレン地域(ベルギー北部、フラマン語圏)に対する先進性や優越性の根拠となり、また当時のフランス(語)文化の圧倒的優越性とも相まって、ワロン人主導による「フランス語圏ベルギー」の演出が成されていた。詳しくは、文献16)、pp.125-128。

(4)ビュルスはブリュッセルのグラン・プラスの近くで生まれたが、体が弱かったため、リンブルグ州(フラマン語圏)の叔父の家で育てられた。

(5)工場排気ガス局・センヌ川及び下水道局・建設貸付金及び年賦局・家屋賃貸局・衛生局・死体運搬組織などが設置された。以後も綿密な収支決算表の作成と特別機関の設置は続けられた。

(6)Yseuxは「私はこの事業の完全な無駄に、ショックを受けている」、Lepageは「これは私達が期待していたのとは違っており、大変幻滅している」、Allardは「醜い建物であり、オーセンシティのかけらもない」と述べ、ビュルスが古めかしい新品を作り出したと非難した。

(7)現在のシャルル・ビュルス通り(rue Charles Buls)。

(8)ビュルスが市長在任中の新規開発を参考文献3,6,7,8,11から抽出し、旧城壁内のものだけを考察の対象にした。

(9)各小見出しの年号はビュルスが対案を提示した年を示している。

(10)政治的には自由党の左翼と右翼の対立激化による団結力の低下、社会主義党の議席獲得などにより政権が保持的になったことが原因と考えられている。また、シュテューベンは13)において、「彼が市長を辞職したのは、病氣や老衰、政治的争いからではなく、旅行や芸術的経験を通して陽気で色彩豊かな東洋の国々や民族を深く知りたい要求が芽生えたからだ」と記している。

参考・引用文献

- 1)フランソワーズ・ショエ(1983),「近代都市-19世紀のプランニング」,井上書院
- 2)平岡直樹(2001),「19世紀後半から20世紀前半の都市計画理念がブリュッセルの緑地形成に及ぼした影響」,信州大学農学部演習林報告,37, pp.163-257.
- 3)LEBLICQ Yvon(1998), *Histoire de l'aménagement des villes*, Press Universitaires de Bruxelles, Bruxelles.
- 4)SUTCLIFFE Anthony(1980), «The Rise of modern urban planning, 1800-1914», Basil Blackwell, Oxford.
- 5)COLLINS George R. et al. (1986), «Camillo Sitte and the birth of modern city planning», Phaidon Press, New York
- 6)SMETS Marcel(1995), «Charles Buls», Pierre Mardaga
- 7)SOLVAY Lucien(1941), «Notice sur Charles Buls», *Annales de la Société d'Académie Royale de Belgique*, 107, pp.119-139., Palais des Académies
- 8)MARTENS Mina(1958), «Charles Buls. Ses papiers conservés aux Archives de la Ville», *Cahiers Bruxelles*, pp.252-323.
- 9)BULS Charles(1894), «Description of the old "Broodhuys" Brussels», *Journal of the Royal Institute of British Architects* vol.2, pp.622-623.
- 10)BULS CH. (1899), City esthetics, *Municipal Affairs*, vol.3(4), pp.732-741.
- 11)FIERENS-GEVAERT Henri(1897), «L'Art Public», *Revue de Paris*, 15, pp.426-448.
- 12)BULS Charles(1894), Description of the old "Broodhuys" Brussels, *Journal of the Royal Institute of British Architects*, vol.2, pp.622-623.
- 13)STÜBBEN Joseph(1900), «Karl Buls», *Deutsche Bauzeitung*, 34, pp.3-8.
- 14)Karina van Herck, Bruno De Meulder(2000), «Vacant City -Brussels' Mont des Arts reconsidered», NAI Publishers, Amsterdam
- 15)STENGERS J (1979), «Bruxelles Croissance d'une capitale», Fonds Mercator, Anvers
- 16)栗原福也(1982),ベネルクス現代史,山川出版社